

ヘーゲル『精神現象学』に於ける「自意識」の研究序説 (一)

『精神現象学』に於ける「生死の闘い」について

——《Gewibheit》と《Wahrheit》——

稲葉稔

一

「承認」とは「自意識の統一的二重化」die Verdopplung des Selbstbewusstseins in seiner Einheitであり、この「承認」の純粹な概念は他の箇所¹⁾で詳細に展開された。そこで次に、「承認のこの純粹な概念のプロセスが如何に自意識に対して現象するか」ということが、問題とされねばならない。即ち、「承認」の現象学的過程はどういうものになるかが問われねばならない。この現象学的過程、即ち「自意識」にとって現象する「承認」の過程は、二つの「自意識」が同等ではなく、「先ず同等である側面を明示する darstellen ことになる」のであって、ヘーゲルはそれぞ「die Mitte が二つの極に分裂すること、つまり die Mitte が二つの相対立する極となり、一方の極は単に承認された者、他方の極は単に承認する者に分裂すること」が現象学的過程の中で「明示される」ことだと言っている。ここで「明示する」 darstellen というのは、現象的な「両自意識」の各々が各々に対して、「その眼前にはっきりと見

せる」こと、その意味に於て「明らかに示す」ことであり、何かそれ以外の主体乃至は場所から「明示する」ことが起つて来るのでは決してない。この語は、『精神現象学』の中の殊にこの箇所、即ち「生死の闘い」の場に於いて、重要な意義を持つ語であつて、このことは以後の叙述に於いて充分注意せられなくてはならない。このことを今少し一般的に言うならば、『精神現象学』の「自意識」の章に到つてはじめて、即ち先に掲げた根本語《Es ist ein Selbstbewusstsein für ein Selbstbewusstsein》が成立し支配する場に於いてはじめて、従つて右の根本語の一つのヴァリエーションである「自意識の統一的二重化」die Verdopplung des Selbstbewusstseins in seiner Einheit に到つてはじめて、「明示する」darstellen 或は「明示し合う」ことが可能となつて来るのであつて、これ以前の段階、即ち「意識」の章に於いては、このことは勿論不可能であつた。従つて、意識のなす経験に随いつつその移行的過程を叙述すべく定められている『精神現象学』は、「自意識」に到れば、「自意識」のなす《darstellen》に随つて「叙述」Darstellung を進めて行かなければならぬ。「叙述」は勝手なことは許されないのである。端的に言えば、この箇所では「自意識」のなす《darstellen》が『精神現象学』の「叙述」と一つに重なつてゐるところがある。《darstellen》の語が殊にここで重要な意義を持つてゐると指摘した所以である。——次に、《die Mitte》即ち相互媒介的中心（媒語）が相矛盾対立する二つの極に分裂するということは、相互媒介（相互推論）、従つて相互平等承認が不可能であるということである。換言すれば、現象過程では「承認」は先ず一方的承認として現われる——正確に言えば、「明示される」——ということである。自他は相互に己れを媒語として提供し合はなないということである。用例的に言えば、Aのみが己れを媒語として提供するのに対し、Bはそれをせず、一方的に媒語Aを通して自己内還帰的完結的推論をなす。従つてここでは一つの円（das Schließen）が成立するのみである。夫々の一をはじめて真に可能にし意味有るものとする「二重意味」は失われたのであり、従つて結局はこの一つの円も成立し得なくなる。「承認」は、相互承認でなく一方的承認である限り、必ずそこに働くロゴスの力によつてくずれなければならぬ。このこと

を現象学的に具体的に弁証するのが、「生死の闘い」及び「主と奴」の弁証法に他ならない。即ちAが「単に承認する者」（奴）であるとすれば、Bは「単に承認された者」（主）なのである。「単に」というのは、相互媒介、相互推論を失った分裂的対立的一方性を謂うのであって、決して単に価値的に低いという意味でないことは明らかである。³⁾

しかしこの不同等的承認も決して一挙にして成ったのではない。我々は如何にして「主と奴」或は「支配と隷属」が成立して来たかを、『現象学』に従って見てゆかねばならない。

「自意識」は先ず「単純な対自独存存在」*einfaches Fürsichsein* である。「単純な」乃至は「単一な」と言うのは、「一切の他者を自己から排除することによって自己同一を保っている」ところの「独り自分だけの、自己自身に對する存在」*Fürsichsein* であるからである。この「自意識」にとって「本質であり且つ絶対的対象」であるものは、「他」ならぬ「我」*Ich* である。従って「自意識」は、他者の媒介を経ないところの「かかる直接態に於いて、換言すれば（排他的に単に、我は我也とする）対自独存のかかる（固定）存在に於いて、個別（孤立的個）*Einzelnes* である。かかる自意識にとっては、我ならぬ他なるものは、否定の刻印を押された非本質的な対象に過ぎない」(Phänomenologie des Geistes, herausgegeben von J. Hoffmeister, S. 143. 以後引用の頁数はすべてこの版による。尚、引用文中括弧内は筆者による。以下も同じ。) 即ちここでは「対自独存存在」(「自意識」)は、一切の「他者」(述語)を自己から排斥しているところの主語として、述語によって媒介されていない直接性に於いて、未だ孤立的な主語に過ぎない。主語は主語として本質的に「対自独存存在」*Fürsichsein* でなければならぬが、この《*Fürsichsein*》は述語を一切有つことの出来ない働きのない主語である、否、一切の述語を排除することによってのみわずかに己れの自己同一を確保し得るに過ぎないところの、従ってこの自己同一も他者(述語)により認められ承認されていないところの、孤立的な主語である。主語の自己同一を保つことのみで精一杯の主語である。主語は個でなければならぬが、これは亦孤である。

「対自独存存在」Fürsichsein というには、個の意味と共にこの孤の面がなければならぬ。

「しかしながら、他者も亦同様に、一つの自意識である。従ってここに於いて、個体に対して個体が登場することになる。このように無媒介的直接的に登場する場合、各個は互に他に対しては（即ち逆に言えば、互に他から見れば）通常一般の（ありふれた）対象という在り方に於いてある Sie sind für einander in der Weise gemeiner Gegenstände. 即ち各個はここで互に他に対しては（つまり互に他から見れば）、自立的な形態 selbständige Gestalt であり、生命という存在——というのは、ここでは存在する対象 der seiende Gegenstand は生命として規定されたのであるから——の中へ埋没している意識に過ぎない」（S. 143）。「自意識」は「対自独存存在」として、他者を排斥することとに於いて孤立的自己同一的主語であった。しかしながら、かく排斥された「他」も同様に一つの「自意識」であり、この「他」から見れば、自己同一的「対自独存存在」という孤立的「個別」も決して孤立的「個別」ではなく、「通常共通的な対象」gemeiner Gegenstand「生命という存在の中へ埋没している意識」に過ぎない。即ちそれは、他から見れば、生命的「一般者の中に埋もれている意識の一つとして、「通常の」、つまり生命「一般」に「共通な」gemein 対象に過ぎず、決して孤立的「個別」Einzelnes ではない。それが自立的であると言っても、それは、生命を持つ個物が夫々持つている「自立的形態」selbständige Gestalt のことと他ならぬ。従って、この排他的「対自独存存在」(Gewissheit von sich selbst) は、実は、gemeiner Gegenstand《*ぶあへ*、*と*》というのが真相 (Wahrheit) なの**ぶあへ**。しかしながら無論ここではこの真相は、この排他的無媒介的「対自独存存在」には「明示され」てはいない。何故なら、言う迄もないことであるが、これはまさしく排他的無媒介的「対自独存存在」であるが故に、「他」による述語づけ、即ちこの場合《gemeiner Gegenstand》*と*という述語を持つことがはじめから不可能であるからである。換言すれば、排他的無媒介的「対自独存存在」=《gemeiner Gegenstand》*と*という真相（判断）は、ここでは「我々に対して」のみ明らかになっているだけであって、もう一つの「他の自意識」にとっても「明示され」てはいない。と言う

のは、ここでは「他」も同様に無媒介的「対自独存存在」であるからである。従って、各自は彼以外の「他」を「対自独存存在」として確信することはなく、知っているのは《gemeiner Gegenstand》としての「他」である。即ち各自には、「他」＝《gemeiner Gegenstand》とこの判断は与えられなければならない。その「他」が「対自独存存在」であるという判断は「明示され」てはいない。各自はまた、「他」＝《gemeiner Gegenstand》に於いて、この《gemeiner Gegenstand》が同時にまた実は自己自身でもあることを知ることがない故に、右の判断が同時に、「他」＝《gemeiner Gegenstand》（自）とあり、従って《gemeiner Gegenstand》に於いて自他は「共通」であり、他即自、自即他であることを、即ち自即対象、対象即自であることを知らない。右の理由から、ここで各々の「自意識」に於いて成立し得るのは、「他」＝《gemeiner Gegenstand》とこの判断のみであり、(一)「他」＝《gemeiner Gegenstand》（自）、(二)「自」＝《gemeiner Gegenstand》（他）、(三)「自」＝《gemeiner Gegenstand》（自）の判断はすべて不可能とならざる。

我々にとって明らかになっているのは、排他的無媒介的「対自独存存在」＝《gemeiner Gegenstand》という真相（判断）であり、右の(一)、(二)、(三)の包括である。ところで上に既に指摘したように、この判断はこの判断自身の内部に於いて矛盾的存在である。何故なら、《gemeiner Gegenstand》であるものの「対自独存存在」は真に《Frisichsein》であることは出来ず、この述語によって主語自身（Gewissheit von sich selbst）が否定されなくてはならないからである。即ち排他的無媒介的「対自独存存在」＝《gemeiner Gegenstand》という真相は、この真相自身によって止揚されなくてはならない。現象学的に言えば、若し右の真相が主語自身（無媒介的「対自独存存在」、即ち Gewissheit von sich selbst）に明示されたとすれば、この主語なる《Gewissheit von sich selbst》自身が止揚されねばならなくなるであろう。しかしここでは、上述によって明らかのように、そのことは不可能であった。この判断は判断の中の「主語」に対しては明示され得ない構造なのである。若し明示されたとすれば、その瞬間この判断そのものがくずれ

るより他ないであろう。この真相（判断）が我々に対してのみある所以である。このことは次に展開される「明示」との対比に於いて一層明確にされる筈である。

無媒介的直接的な自他の「両自意識」は、互に他から見れば、《gemeiner Gegenstand》と「在り方に於いてあり、生命という存在の中へ埋没している意識」であった。従ってこれら「埋没的両意識」は、「絶対的な捨象・抽出 die absolute Abstraktion の運動、即ち一切の直接的無媒介的な存在を絶滅し以て純粹に否定的な存在としてひたすら自己同一的意識なりとする絶対的な捨象・抽出の運動」 die Bewegung der absoluten Abstraktion, alles unmittelbares zu vernichten und nur das rein negative Sein des sichselbstgleichen Bewußtseins zu sein を「互に他に対しては、（即ち逆に言えば、互に他から見れば） füreinander 未だ成就してはならない。」換言すればこれら両意識は自分が純粹な対、自独存存在、即ち自意識なりと未だ相互に明示し合っていない。」 oder sie haben sich noch nicht als reines Fürsichsein, d. h. als Selbstbewußtsein dargestellt. S. 143. 1111f. 《die absolute Abstraktion》云々ののは、すべての直接的無媒介的存在を否定捨象することによって、即ちここでは直接的な「生命と、自存存在」を捨象することによって、「生命という存在の中へ埋没している意識」をその中から抽出すること、しかもそれを「純粹に何処までも否定的な存在」即ち「自己同一の意識」として抽出することである。捨象・抽出とは、物の場合には、或る部分乃至成分を捨象することによって、他の部分乃至成分を抽出するということである。即ちその場合には、捨象・抽出の働きははじめから捨象・抽出されたものとは別に、その外にある。しかしここでは決してそうではない。《Abstraktion》の働きの主体は「生命という存在の中へ埋没している意識」であり、捨象・抽出されるべきものも「生命と、自存存在の中へ埋没している意識」である。即ちそれは、「一切の直接的無媒介的存在」を捨象するというのであるから、この捨象する働きによってのみ且つこの働きとしてののみ、はじめて、なくてはならぬ抽出すべきものが「純粹に何処までも否定的な（働きの）存在」（従ってその否定的働きの於て且つ働きとして「自己同一の意識」として開かれて来る

という、「自意識」そのものの、即ち「自意識」による「自意識」そのもの——《Abstraktion》に他ならない。或る直接的存在が先ずそして最後まで捨象の働きのとしてあって、そうしてそれが他の直接的存在を捨象し、更に他の直接的存在を抽出するというのでは、「一切の」直接的存在を捨象することにはならない。捨象の働きの抽出されるべきものが別々にあり、しかもはじめから抽出されるべきものが捨象の働きのから離れて直接的無媒介的に存在しているというのでは決してないことは、明らかであろう。捨象の働きの抽出されるべき「否定的な存在」とは一つである。その働きの《darstellen》であり、《darstellen》されるものはこの《darstellen》の働きの（否定的存在）そのものに他ならない。抽出されるべきものは直接的存在の中の何処にもない。そうでなくては「一切の直接的存在」の捨象とは言えない筈である。この《Abstraktion》が《absolut》と形容されている所以である。この《Abstraktion》の運動を各自は、互に他に対して即ち互に他から見てもはっきりそれであると判るように、成就しなければならぬ。何故なら、若しそれを成し得なかつたとすれば、各自は直接的無媒介的「対自独存存在」であって、それは互に他から見れば《genereller Gegenstand》に過ぎないからである。そしてそれを成し遂げることが、自己を純粹「対自独存存在」として他の眼前にはっきりと見せること即ち他に対して「明示する」ことに他ならない。

しかしながら、ここでは未だ各自は、この《absolute Abstraktion》の運動を、互に他の眼の前にはっきりと示す仕方成し遂げていない。「自意識」は始めは単に他を我から排除することによって、単に我は我也とする自己同一であった。従って、各自はかかる自己同一として自己自身を確信しているであろうが、それが単に排他的にのみ成立するのであるから、その場合他者を確信してはいない。他者が実はどういふ存在であるかを確信することがない。即ちこの場合、他者も自己と同様に、彼の他者（この中には当然自己も含まれることになる）を排除することにより、他者自身の自己同一に於いて自己確信性を持つていようであろう。つまり、各自の排他的自己確信性は、その排除された他己の自己確信性によって実は逆に排除されているに過ぎないであろう。

「各自は自己自身を確信してはいるであろうが、他者を確信してはいない。従つて各自自身の自己確信性 (Gewißheit von sich selbst) は未だ Wahrheit ではない。何故なら、各自の Wahrheit とは、各自自身の対自独存存在が「自立的対象として各自に明示されたといふこと」即ち同じことであるが、対象がこの純粋な自己確信性として明示されたこと以外にはあり得ないであらうから」Jedes ist wohl seiner selbst gewiß, aber nicht des andern, und darum hat seine eigne Gewißheit von sich noch keine Wahrheit; denn seine Wahrheit wäre nur, daß sein eignes Fürsichsein sich ihm als selbständiger Gegenstand, oder was dasselbe ist, der Gegenstand sich als diese reine Gewißheit seiner selbst dargestellt hätte. S. 143~144. フのヘーゲルの語は非常に重要である。と言ふのは、フの語の理解が、以下のヘーゲルの叙述 Darstellung 特に「生死の闘い」の終結に至るまでの叙述を解明するために必須であるからである。そこで、自己自身の「対自独存存在」(自)が「自立的対象」selbständiger Gegenstand として「明示されること」、しかもフのフが「自」(フ)とは「Fihm」(フ)明示されることとはどういふことであるのか。即ち「対自独存存在」|| 「自立的対象」という判断(統一)が成立し、しかもこの判断全体が「我々に対して」といふより、この判断の中の主語に対して、明らかにされていることとはどういふことであるのか。又それは如何にして可能であるのか。

「直接的排他的孤立的対自独存存在」は、互に他から見れば、実は《gemeiner Gegenstand》に過ぎなかつた。換言すれば、そこでは各自は互に他を《gemeiner Gegenstand》として見ていた。そこで《gemeiner Gegenstand》とは、各自が自己の外に他として見るものであった。ところが他として対象として見るものが、更に「他から見れば」実はそっくりそのまま自に当つてはまるのであった。各自の《Gewißheit von sich selbst》は他から見れば《gemeiner Gegenstand》としてしか見えない。自が他に於いて对象的に見ていたものが、実は自の知らないところでの外で《Gewißheit von sich selbst》の外で即ちフは「他から見れば」といふ対象客観的な場つ、自の客観的な真相であ

た。外に対象として他として見ていたものが、その実自の知らぬところで自そのものに他ならなかった。この「Gewilheit von sich selbst」の知らぬ「unwilt」は「Gewilheit」の「Gegenstand」との統一（判断）が「Wahrheit」として成立していたのである。従ってこの「gemeiner Gegenstand」とは、他であると共に自の知らぬところで自そのものである。即ちこの「Gewilheit von sich selbst」（自）＝「gemeiner Gegenstand」（他、或は自）という判断は「我々に対して」のみあり、この判断自身の中の主語即ち「Gewilheit von sich selbst」には「明示され」ていない。逆に言えば、それだからこそそれは「単」に「Gewilheit」であり、対象客観的な述語を持つことが出来ないであつた。ところで各自の「排他的直接的対自独立存在」が他から見れば「gemeiner Gegenstand」であるとするとき、この「Fürsichsein」＝「gemeiner Gegenstand」という判断は、「他から見れば」というときの他に対しては一見明らかになつて見えるように見えるかも知れないが、しかし決してそうではないのであつて、ここでは他も同様に「排他的直接的対自独立存在」である限り、他の他を「Fürsichsein」として知ることがなく、ましてこの後者を主語として措くことは不可能である。若し「Fürsichsein」として他の他を主語として措くことが出来たとしたら、他は最早自身「排他的直接的対自独立存在」即ち排他的孤立的な主語ではなくなる筈である。従つて若しここで各自が判断し得るとすれば、それはせいぜい「他」＝「通常共通の対象」という陳腐的な判断に過ぎず、決して「Fürsichsein」＝「gemeiner Gegenstand」という判断ではない。今一度言えば、この「他」では自は「排他的直接的対自独立存在」という孤立的な主語としてあり、他はその主語に対して「gemeiner Gegenstand」という述語を潜在的には提供し得るけれども、自他は共に無媒介的排他的に「対自独立存在」であるから、この孤立的な主語及び潜在的な一般的述語は、相互に即ち自他という場面では、結びつかないのである。即ち、この孤立的な主語は無媒介的排他的に「対自独立存在」として述語を持たぬし、又この主語に対して潜在的に述語づけ得る他はここでは同様に無媒介的排他的に「対自独立存在」として、真に主語（この場合、他の他）を知らないからである。自他のこの関係は、他自的に考えても即ち他を孤立的な

語とした場合でも、上述のことと全く同じになることは言を俟たない。

そこで問題は、「排他的無媒介的対自独存存在」||「通常共通的对象」(この判断は判断の中の主語には明示されていない)という我々の判断から、「純粹対自独存存在」||「自立的对象」という判断、しかもこの判断全体が判断自身の中の主語に明示されているところの判断へ、如何にして移行し得るのか、ということになる。この後者の判断とは、自の「対自独存存在」が他から見ても「自立的对象」(最早「通常共通的对象」ではなく)であり、しかもこのことが他から「自に」明示されることでなければならぬ。このためには先ず、(一)自の「対自独存存在」が上述の《Die absolute Abstraktion》を遂行して、他から見ても「通常共通的对象」たることを脱して「自立的对象」とならなければならぬ。即ち、他に対して「彼の他」||「自立的对象」たることが明示されなくてはならない。しかもそれだけではなく同時に、(二)他から「彼の他」(ここでは、自)に、対して、「彼の他」の述語は「自立的对象」であるとなされなければならない。ここに到って(一)及び(二)の総合として、自の「対自独存存在」は己れの述語を「自立的对象」として、他から受け取るのである。ここで自に、*gew*、*Gewibheit von sich* || *selbständiger Gegenstand* という判断が真に成立しているかに見える。しかし、これでも未だ不充分である。と言うのは、自は *Gewibheit von sich* として、自の述語を *selbständiger Gegenstand* として他から受け取ってはいるが(他から示されてはいるが)、しかし、*gew* の自の述語たる *selbständiger Gegenstand* と—— *selbständiger Gegenstand* と *gew* ——未だ何処にも見ていないからである。従ってここでは、(一)自は他によって *selbständiger Gegenstand* として述語づけられ、(二)且つこの述語づけを示されているけれども、この述語を対象として確認していない。即ち、自己の述語を真に述語として——对象的に即ち述語的に——知っていない。そのためには、(一)「自己確信性」に対して「自立的对象」であるという述語が他から与えられ、(二)且つこの述語づけが「自己確信性」に示されていると共に、しかも、(三)この「自立的对象」という述語が同時に、他の身上に於いて、即ち他として、現実に、对象的に、「自己確信性」に明示さ

れなくてはならない、述語が真に述語的となっていないてはならない。つまり、「自己確信性」(主語)に対して「自立的対象」という述語が、他から且つしかも他として真に対象客観的に明示されていなくてはならない。自なる「対自独存存在」(主語)に対して、他が「自立的対象」という述語づけを主語自身に示し、この「示す」ことが真に対象客観的であらんために即ち「明示」であらんために、他が他自身「自立的対象」となって自身を述語として、自に提供するのでなければならぬ。ところで、自に対して、他自身が「自立的対象」となり「自立的対象」として明示されるためには、まさしく上述の「die absolute Abstraktion」を、他が他の自身側から遂行して、いなくてはならない。即ち「die absolute Abstraktion」の運動を、自他が相互に相互に対して遂行するのでなければ、各自にとって「対自独存存在」(自) || 「自立的対象」(自且つ他) という判断(判断全体が判断中の主語に明示されている判断)は、成立し得ないのである。ヘーゲルがここで次のように語っている所以である。「この上述のことは、承認の概念から言つて、他が自に對するが如くに自も他に對し、各自、自らの身上に於いて自己の行為によると共に同時に他の行為によつて、対自独存存在の純粹な捨象・抽出 die reine Abstraktion des Fürsichseins を遂行する以外には、不可能なのである」(S. 144)。

》Gewiheit von sich《(自) || selbständiger Gegenstand《(自且つ他) という判断が判断の中の主語に対して成立するためには、上述のことがなくてはならなかつた。ところで言うまでもないであろうが、この《Gewiheit《(主語)とそれの《Gegenstand《(述語)との統一(判断)が、ヘーゲルの言つてゐる《Wahrheit《に他ならなかつた。この《Wahrheit《は、単に孤立的排他的主語として単に排他的に我は我也とする《Gewiheit von sich《ではなく、また単に一般共通的に「対象」的にあるのでもなく、両者が媒介的統一に向つて止揚されることにより、「純粹自己確信性」 || 「自立的対象」の判断が主語(Gewiheit von sich) に対して成立することではなければならぬ。換言すれば、右の判断が成立することによつて、実は単に「通常共通的な対象」であるに過ぎなかつた《Gewib-

heit von sich》は、「自己に明示されている判断の中」《Wahrheit》と成るのである。各自の「対自独存存在」に対して他が他自身を「自立的対象」として述語として提供し得るように、そのように共に自他がならなければ、《Wahrheit》(判断)は自他に対して成立し得ない。これが自他による他自の相互承認ということに他ならないであろう。各自の「対自独存存在」||「自立的対象」(他)、或は同じことであるが「対象」(他)||「純粹自己確信性」(自)の相互媒介的統一の真相に於いては、自即他、他即自でなければならぬ。自他は相互に自立的述語となり得て、相互に己れを述語として提供し合わなければ、この真相(判断)の中へ参入することは出来ないであろう。このことがヘーゲルが「承認の概念」として述べたこと、即ち「自意識の二重化に於ける統一」die Verdopplung des Selbstbewußtseins in seiner Einheit であり、右の判断に他ならぬ。以上のロクスにより、真理は排他的孤立的《Gewibtheit》ではなく、ここでは相互自立的相互承認でなければならず、しかもこの真理は単なる一方的承認によっては決して真に客観对象的に存在し得ないこと(上述の(三)参照)が明らかにされたことと思う。

「対自独存存在」(自)||「自立的対象」(他)、或は「対象」(他)||「純粹自己確信性」(自)の相互媒介的真相が成立するためには、どういふことがなければならぬかを、以上に於いて半は先行的に述べて来た。では現象する両「自意識」はこの相互媒介的統一判断の中へどのように入ってゆくのであろうか。換言すれば、上述の《die absolute Abstraktion》を両「自意識」は各自どのように遂行してゆくのであろうか。

「ところで各自が自己を自意識の純粹な Abstraktion として明示することは、自分は自分の对象的な在り方を純粹に否定したのだと示すこと、換言すれば、自分が限定された定有、Dasein に繋がれてはいないこととを………生(命)に繋がれてはゐないことを示すことである」Die Darstellung seiner aber als der reinen Abstraktion des Selbstbewußtseins besteht darin, sich als reine Negation seiner gegenständlichen Weise zu zeigen, oder es zu zeigen, an kein bestimmtes Dasein geknüpft, ……nicht an das Leben geknüpft zu sein. S. 144. »die reine Ab-

straktion des Selbstbewusstseins」とは、「自意識」による、「自己の对象的な在り方」の否定・捨象であり、まさしくそのことにより且つそのこととして「自意識」を抽出することである。では、この「自己の对象的な在り方」とは何であるのか。それは、先の言葉に従えば、「生命という存在の中へ埋没している意識」としての在り方、或は換言すれば、（他から見れば）「通常共通の対象」としての自己の在り方である。従って「自己の对象的な在り方」とは、生命に共通した身体的意識の在り方であり、今少し一般的に言えば、他に向う自己の在り方、即ち「自意識」が「自意識」としては絶対捨象しなければならぬ「意識」、対象的意識の在り方に他ならない。ところで対象的意識の在り方は、やはり、自己の身体に於いて最も身近に且つ最も具体的に具現されている。対象的意識の在り方を最も具体的に代表するものは身体に他ならない。対象的意識にとって最も身近な対象は自己の身体でもある。「生命という存在の中へ埋没している意識」とは、従って他から見て生命に「共通な通常の対象」とは、具体的には身体のことである。従って「自己の对象的な在り方の純粋な否定を示すこと」（即ち「意識」たらずして純粋に「自意識」なりと明示すること）は、対象意識のすべてをその具象化であるところの自己の身体に於いて否定してかかること、換言すれば自分の身体を的にして生命を捨ててかかることに他ならない。それは、「生(命) das Leben に繋がれていないのだと示すこと」、生に固執していないと明示することではなければならない。即ち自己の述語は《bestimmtes *Das sein*》でもなければ《das Leben》でもないという否定判断を先ず明示することではなければならない。ヘーゲルのテクストのイタリックにされた二つの語に即して言えば、《*Dasein*》ということこそ自己の述語としては否定し、自己はそう言う《*Sein*》ではなく、自己は自己の「明示」(*Darstellung*)として自己を否定的に《*Stellen*》することではなければならない。排他的直接的「自己確信性」の述語は実は「通常共通の対象」であり、その「対象」性は生(命)に繋がれた自己の身体性であるとすれば、「対自独存存在」は真に「対自独存」たるべく「自己の对象的な在り方」の純粋な否定として自己を明示しなければならぬ。換言すれば、排他的直接的「自己確信性」の（止揚的）徹底は、

一切の对象的なるものの排除・否定に於いて、遂に自己にとつて最も身近な対象即ち自己の身体を捨象・否定してからねばならないところまで、そしてそのことは後述のように、殺他にまで到らねばならなくなるのである。

ところで「この明示 Darstellung は二重の行為である。他者の行為であると共に自己自身による行為である」(S. 144)。「この明示の行為」は自他ぶつかり合い相互明示とならざるを得なくなる。と言うのは、一方からして「明示が他者の行為である限り、各自は他者の死を指す」(S. 144)、即ち他者を殺さねば止まないからである。即ち他者が生命を的にして来た限り、自己も必然的に(ドイツ語を使うとすれば、notwendigerweise に)受けて立たざるを得ない、従つてその中に捲き込まれざるを得ない。そうしなければ窮地を脱することが出来ない。他者が生命を的にして来ている限り、自己は窮地轉換的に(必然的に)他者の死を指さざるを得ない。「ところでそのこの内には、自己自身、第二の行為即ち自己自身による行為が現前している。何故なら、他者の死を指すということの内には、自己自身の生命を賭けること das Daransetzen des eigenen Lebens が含まれているからである」(S. 144)。一方の「明示の行為」は窮地轉換的に(必然的に)他方の「明示の行為」をうながす。一方が「自己の对象的な在り方の純粹否定として自己」を《Darstellen》することは、他方自身の生命の《Daransetzen》を引き起す、即ち他方自身が「自己の对象的な在り方の純粹否定として自己」を《Darstellen》することとなる。かくして、「明示の行為」は自他相互による両同一行為の重なり合いとならざるを得ない。

ここに於いて「両自意識の關係は、両者が生死を賭けた闘いを通して、互の真なることを証し合うべく且つ自己自身の真なることを証すべく定められ運命づけられている。両者はこの闘いの中へ入らねばならない。その故は、両者は、対自独存なりとする自己確信性を、他者に於いて且つ自己自身に於いて真理にまで高めなくてはならないからである」Das Verhältnis beider Selbstbewußtseins] ist also so bestimmt, daß sie sich selbst und einander durch den Kampf auf Leben und Tod betreiben. Sie müssen in diesen Kampf gehen, denn sie müssen die Ge-

wilheit ihrer selbst, *für sich zu sein*, zur Wahrheit an dem andern und an ihnen selbst erheben. S. 144. 両者が「互の真なる ワ を証し合ふ」einander bewähren¹ 且 ワ の ワ の中 ワ 各自が「自己自身の真なる ワ を証し合ふ」*sich selbst bewähren* ワ と ワ 上述の相互的「明示」によつて、各自の《Gewilheit von sich, *für sich zu sein*》(主語)に對して《reine Negation seiner gegenständlichen Weise》と云ふ述語が、(一)他から(自自身の述語として、即ち他から ワ の述語の通り ワ と ワ) (二)且 ワ 他 ワ (他自身が自に對して「対象」的 ワ の述語となり)‘negativ 在方では ワ が明示 ワ を提供 ワ する ワ と ワ ’ ワ と ワ 《Gewilheit von sich, *für sich zu sein*》(自) = 《reine Negation seiner gegenständlichen Weise》(自、 ワ 他)と云ふ 《Wahrheit》が「各自」(判断自身の中の主語)に對して明示されてゐることであり、従つてこの相互媒介的統一の真相の中で、換言すれば相互承認の中で、各自が自己自身を承認することである。特に右の(二)に於けるように、相互媒介的に各自が互に他に對して自ら述語となり、自らを述語として明示提供することがないとするれば、つまり他を身を以て承認することがないとするれば、従つてまた他によつて身を以て承認されることがないとするれば、各自の自己承認も無媒介的に単なる《Gewilheit von sich》にとまり、真に「対象」客観的に《bewähren》され得ないであらう。「自己自身の真なる ワ を証しする」或は「自己自身を真理にする」*sich selbst bewähren* ワ とは、「相互に真理にし合ふ」einander bewähren ワ によつてはじめて真に可能となる。即ち、一方的に自のみでは ワ では《bewähren》(真理にする)といふことは不可能なのである。

それ故に「自他の両者はこの闘いの中へ入らねばならない」。そうして「両者は、対 ワ 、自 ワ 、存 ワ なりとする自己確信性を、他者に於いて且つ自己自身に於いて真理にまで高めなければならない」。即ち、「明示」の二重化によつて《Gewilheit von sich, *für sich zu sein*》(自) = 《reine Negation seiner gegenständlichen Weise》(自、 ワ 他)と云ふ《Wahrheit》が各自(判断中の主語)に對して、negativ な仕方ではあるが、 ワ の negativ と云ふ意味に ワ と

は後述する)、明示されなければならぬ。各自の《Gewiheit von sich, für sich zu sein》が「他に於いて且つ、自己自身に於いて」(傍点筆書)《reine Negation seiner gegenständlichen Weise》とて述語を持ち、このことにより《Gewiheit von sich, für sich zu sein》(主語)が《Wahrheit》(判断)の中へ止揚的に高められなければならない。この《Gewiheit》から《Wahrheit》への止揚的運動を示す動詞が、上述のイタリックされた《bewähren》とて語に他ならぬ。今少し言えば、*Wahrheit*とは、「対自独存存在」(自) || (reine Negation seiner gegenständlichen Weise とて)の「対象」(自且つ他)、「対象」(他) || 「自己確信性」(他且つ自)とてある。自他は「己れの对象的な在り方の純粹否定」を相互に明示し合うことによつて、各自は、(一)他者も自己と同様に他者自身の自己確信性を持っているということを知り、それを承認し——「対象」(他) || 「自己確信性」(他且つ自)——、そのことによつて(二)今迄の孤立的排述語的「自己確信性」が単に孤立的の主語ではなく、同時に述語であることを知り、従つてこの孤立的の主語が《Wahrheit》(判断)の中へ止揚されることを知り、そのことは同時に(三)各自主語的「自己確信性」が他者によつて認められ、且つ「対象」客観的に述語つけられることであり、しかもそのことを知ることである——「自己確信性」(自) || 「対象」(自且つ他)——。《Gewiheit von sich》が《Wahrheit》に高められるということは、孤立的の主語的であつた「自己確信性」が「対象」的述語を持つことであり、また同時に、「対象」という主語に対して自ら述語となり得るように、そういうように「対象」が明示されることである。いずれにせよ、「自己確信性」 || 「対象」、「対象」 || 「自己確信性」の全体が「真理」である。「自己確信性」の「真理」は、排述語的に他を排除することでは決してなく、自他他自を主語 || 述語とする相互媒介的二重判断でなければならぬ。そしてこの《Gewiheit von sich》が《Wahrheit》に高められるために、「明示」の二重化即ち「生死を賭けた闘い」は必須の関でなければならぬ。すべてたまたかというものは、その根本に於いて、《Gewiheit》と《Wahrheit》との間の矛盾であり、前者から後者への高まりに於いて前者が止揚されることである、とてうことが出

来る。たたかいの真の原動力は、存在論的な意味に於いては、この両者の間の矛盾であって、単に人間と人間との対立ではない。

「明示」の統一的二重化は、「自己確信性」＝(reine Negation seiner gegenständlichen Weise としつつの)「対象」であり、この判断が判断中の主語に対して明示されることであつた。ところでこの「真理」に於いて、述語たる「対象」(自己、他)は《reine Negation reiner gegenständlichen Weise》としての「対象」である。「己れの生命的身体の否定を賭けてそれを明示した自己否定的な「対象」である。即ち、自己、他によるこの「対象」の二重化は、「生死の闘い」として、この「対象」の捨象を目指し、それに終らねばならない。そうすると、「自己確信性」＝[reine Negation seiner gegenständlichen Weise としつつの]「対象」(自己、他)という「真理」は、この判断中の述語を捨象すべく動いてゆくことにならざるを得ない。従つてその結果は、述語喪失とならなければならぬ。即ち判断(真理)喪失とならなければならぬ。即ち、「自己確信性」＝[reine Negation seiner gegenständlichen Weise としつつの]「対象」(自己、他)の判断は、この判断そのもののロコスによつて、存続することの不可能な判断である、消滅的否定的な判断である。それは消滅的消極的な相互承認である。この「真理」の真相は、この「真理」の消滅である。述語がその自己否定の二重化に於いて消滅的であるとすれば、判断も消えてゆくより他ない。先に、この判断の在り方が negativ であると先行的に言つておいた所以である。従つて、この「真理」が消滅しないためには、この「真理」の中で述語が存続的とならなくてはならないであろう。即ち「対象」が自己否定に於いて同時に、自立的であるようにならなくてはならないであろう。ところで、自己否定に於いて同時に自立的である「対象」こそ、ヘーゲルに従えば、「自意識」なのでもあつた。「自己確信性」＝「自己否定的対象」の「真理」は、「自己確信性」＝「自己否定に於いて同時に」自立的な対象」とならなければ、真に存続する「真理」にはならないであろう。「自己確信性」(対自独存存在)が「自立的対象」(他)から「自立的対象」(自)として、且つ「自立的対象」(他)として、述

語づけられるのでなければ、判断全体も真に「対象」客観的に自立してゆくことは出来ないであろう。が今は我々は、この消滅的消極的相互承認に随い、それを見てゆかなければならない。

「生を賭することによってのみ、自由が、真なりと証し *bewähren* され、自意識にとって本質であるところのもの、(固定的な) 存在でもなければ、自意識が最初に登場した場合の直接的無媒介的な在り方でもなく、生の広がりの中に埋没していることでもないということ、却って自意識にとって消滅的契機でないところのものは自意識の許にあっては現に何一つとしてないことが、かくて自意識は(一切の固定的な存在及び固定的な在り方を去った) 純粹対自独存存在に他ならないことが、真なりと証しされる。生命を賭したことのない個人は人、*Person* として認められるでもあろうが、自主的自意識として承認せられているという真理には達してないのである」S. 144。

自他両「自意識」は共に、この「明示」の二重化に集せられて、「闘い」の中に入らねばならない。》*sich als reine Negation reiner gegenständlichen Weise zu zeigen*》としての「明示」の二重化は、即ち「生死を賭けた闘い」になるからである。この「闘い」及びその終結を叙述するヘーゲルのテキストは、次の如くである。

「各自が己れの生を賭けるということは、他者の死を指すことではなければならない。と言うのは、他者は各自にとって最早自己自身として妥当しないからである。即ち他者の本性は各自にとって一つの他として明示されて来る。そこで各自は *außer sich* である。各自は己れの自己外存在 *Außersichsein* を止揚しなければならぬ。他者 *das Andre* は様々に束縛された(固定的に) 存在する意識である。各自は己れの他在 *Anderssein* を純粹対自独存存在として即ち絶対的否定として直観しなければならぬ」*Ebenso muß jedes auf den Tod des andern gehen, weil es sein Leben daransetzt; denn das Andre gilt ihm nicht mehr als es selbst; sein Wesen stellt sich ihm als ein Andres dar, es ist außer sich, es muß sein Außersichsein aufheben; das Andre ist mannigfaltig befangenes und seiendes Bewußtsein; es muß sein Anderssein als reines Fürsichsein oder als absolute Negation ansch-*

auen. S. 144. このヘーゲルの言葉は実に難解である。が我々は、上述して来たことの聯関に於いて、この言葉を解明してゆかなければならぬ。

「闘い」に於いて、自他両「自意識」は、固定的存在の具象化である身体の純粹否定として自己を示し、その二重化に於いてこの「对象的な在り方」を相互否定に供し合う者として、即ち相互に生命を賭して一切の固定的存在を否定消滅せんとする「純粹対自独存存在」として、相互に明示し合う。即ち自己自身をそのような述語として互に他に与え合う。その点に於いて両者は(統)一であり、「対象」(他) || 「純粹否定的自己確信性」(自)、「対自独存存在」(自) || 「自己否定的対象」(他)なる判断の統一(Wahrheit)である。他即自自即他である。「我」は敵に於いて却って己れと等しき友を見る。がしかし、まさしく生死の、殺すか殺されるかの「闘い」の真中に入るや、様相は全く一変する。殺すか殺されるかの中に於いては、他は最早上述のように相互に認め合った《reine Negation seiner gegenständlichen Weise》の相としては、即ち敵なる友としては明示されて来ない。「他者は各自にとって最早自己自身として妥当しない。他者の本性は各自にとつて一つの他として明示されて来る」。それは、「対象」(他) || 《reine Negation seiner gegenständlichen Weise》(自、他)の《Wahrheit》がくすれ、自他他自を主語 || 述語とする判断が判断の主語に対して成立しなくなったことである。他即自ではあり得なくなつたことである。即ち今や、「他」は「一つの他」であり、「対象」 || 「対象」の固定的タウトロジーに墮していることである。今や敵は、我が殺さんとする敵なる敵である。敵は、我が殺さんとつけ狙う否定さるべき身体となる。即ち敵は「生命」という存在の中へ埋没している意識、「(単に固定的に)存在する意識」に脱落一変する。換言すれば、自他が「自分達の对象的な在り方の純粹否定を示し合う」ことは、この上の中から互に「他の对象的な在り方」だけを前面に抽出せしめ、そうしてそれからそれを捨象せんとする、いわば *abstrakte Abstraktion* に一変してしまふ。「自分達の对象的な在り方の純粹否定」の中から、互に「他の对象的な在り方」が抽出され前面に出て来る。何故なら、自他は互に他に対

してこれを賭け合つたからである、これを「*daransetzen*」（表面に置く）し合つたからである。

他が「対象」||「対象」という固定的、タウトロギーとして現われることにより、この他は述語的には流動せず、従つて「対自独存存在」（自）は「対象」的述語を得ることが出来ない。「対自独存存在」||「対象」の判断は不可能となつたのである。各自は、『*Wahrheit*』の中の述語を失つた主語として、『*Wahrheit*』の中で自己の位置を失う。即ち各自は、我を失い、茫然自失、自己を出て自己の外へ、即ち固定的タウトロギーである他に撞着している。それが『*es (jedes) ist auBer sich*』といふことである。それは、主語的に言えば、我はかく一変した固定的タウトロギーの他にそっくり「我」を奪われているといふこと、従つて主語喪失といふことである。従つてまた、この主語喪失的非主語（自己喪失の主語）は勿論固定的タウトロギーの中へ述語としても、入つて行くことは出来ない。固定的タウトロギーは己れ以外の述語を要しないからである。これは具体的にはどういふことかと言へば、我も最早「純粹自己確信性」といふ主語でもなく、また他に対して己れを述語として提示することもなく、生命的身体といふ敵をひたすら否定せんとしている単なる一途な身体に脱落しているといふことである。同様に自も、今や「自意識」などというやうなものでは全くなく、「生命といふ存在の中へ埋没している意識」即ち単なる身体となつていふことである。『*GewiBheit von sich, für sich zu sein*』の喪失であり、主語喪失的非主語である。「闘い」は身体と身体との身体的なぶつかり合いである。即ち、闘いそのものの全体が固定的タウトロギーとなるのである。

しかしながら「各自は己れの *AuBerichsein* を止揚しなければならぬ」*es muß AuBerichsein aufheben. Das sein AuBerichsein*』とは、上述の『*es ist auBer sich*』といふことが含んでいた全体の事態に他ならない。それは、今一度簡潔に言えば、(一)主語喪失といふ「存在の在り方」であり、(二)この在り方の中で主語喪失的非主語がここには「他は一つの他である」といふ固定的タウトロギーの「他」に撞着しているといふことであり、(三)且つこの主語喪失的非主語がその「他」の在り方に『*auBer sich*』な仕方（我知らずに）同化しているといふことである。つまり、

以上の三つの事態を有つてゐる「存在の在り方」といふことである。従つて《AuBersichsein》とは勿論《Wahrheit》（判断）の喪失態としての「存在」である。闘ひはかかる《AuBersichsein》の場でのみ戦われるのである。否闘ひそのものの全体がこの《AuBersichsein》に他ならぬ。『自意識』中に絶対に残るところの、否それの絶対契機であるところの、対象「意識」の深く相が、「闘ひ」の真中に於いて脱「自」的に勝を占めて、全面的に身体の具体相となつて、一挙に出現する。各々はこの《AuBersichsein》を止揚して《Wahrheit》に達せねばならぬ。

この《AuBersichsein》に於いて、「他は様々に束縛された（固定的に）存在する意識である」das Andre ist mangelhaft befangenes und seichendes Bewußsein. 他は、「対象」＝「自己確信性」といふ、自によつて述語づけられたところの、自と同じ「自己確信性」であることを自によつて提示され認められたところの真相的主語ではなく、従つてまた、「自己確信性」＝「対象」といふ、自の「自己確信性」（対自独存存在）を「対象」客観的に真に証しするところの真相的述語でもなく、すべてさういふ「働きを奪われた」befangen とするの、「閉じ込められた」befangen とするの埋没的固定的タウトロギーとつて、自の《AuBersichsein》に於いて（「固定的に）存在する意識」即ち《gemeiner Gegenstand》（身体）である。即ち他も、自の《AuBersichsein》に於いて、決して今や「対自独存存在」（主語）ではなく、自と同様に主語喪失的非主語である。《gemeiner Gegenstand》は主語であることは出来ない。ここに於いて我々から見れば、自から見て「他」＝「他」といふ固定的タウトロギーの他は、自と同じく主語喪失的非主語であつて、他は実は自の真相的述語に他ならない。ただしかしこの判断は、判断の中の（我々にとっての）主語、即ち主語喪失的非主語には明示されないのは、論を俟たない。

がしかし、「闘ひ」の終結が来なければならぬ。「各々は己れの他在 Anderssein を純粹対自独存存在として即ち絶対的否定（の力）として直観しなければならぬ」es muß sein Anderssein als reines Fürsichsein oder als absolute Negation anschauen. 此の《Anderssein》は、右の《AuBersichsein》と同じ事態である。

る。右に《AuBersichsein》に就いて述べたことの、特に(三)の事態である。即ち《Anderssein》とは、主語喪失的非主語が《das Andre》の在り方に《auBer sich》にvari、「他」のようになり、それに同化しているその在り方である。従つてまたそれはこの他者の在り方であり、他者の存在である。従つて《AuBersichsein》或は《Anderssein》とは、主語喪失的非主語の在り方であると共に、この主語喪失的非主語がその《auBer sich》に撞着しそして同化してゐる《das Andre》の在り方でもある。それは、この二つにまたがる存在の在り方である。各々は己れの《AuBersichsein》或は《Anderssein》を「純粹対自独存在」として即ち「絶対的否定の力」として「直観」しなければならぬ。それは一体どういふことであるのか。他はもなう。《AuBersichsein》即《reines Fürsichsein》の「直観」が即ち「生死の闘ひ」の終結である。即ち《AuBersichsein》即《reines Fürsichsein》を「直観」した瞬間が即ち自己或は他者の死である。

即ち右に於いて述べたように、この《AuBersichsein》とは、主語喪失的非主語の在り方であると共に、そこに於いて同時に他者の在り方であり他者の存在であった。従つて、(一)《AuBersichsein》(主語喪失的非主語)即《reines Fürsichsein》(絶対否定の力)の「直観」は即ち他者の死であり、(二)やむなければ、《AuBersichsein》(他者)即「絶対否定の力」(reines Fürsichsein)の「直観」は即ち自己の死に他ならぬ。主語喪失的非主語が《AuBersichsein》に於いて他者を絶対否定した(打ち殺した)瞬間が即ち(一)の「直観」であり、やむなければ、他者が《Anderssein》に於いて主語喪失的非主語を絶対否定した瞬間が即ち(二)の「直観」に他ならぬ。換言すれば、(一)《AuBersichsein》(主語喪失的非主語) = 《reines Fürsichsein》の「直観」として、主語喪失的非主語は自己(主語)を即ち《reines Fürsichsein》を恢復し、そのに於いて《gemeiner Gegenstand》としての他を絶対否定してゐる。或は、(二)《Anderssein》(他者)即《absolute Negation》の「直観」として、主語喪失的非主語は死ぬのである。闘ひの真中の否闘こそそのトキに《AuBersichsein》の Zweideutigkeit から、Eindeutigkeit (一)かしからずんば(二)へ決着する

「*Außerichsein*」の *Zweideutigkeit* の止揚が、即ち闘いの終結である。

しかしながら、ここではまだ次の問いが残されている。即ち、この生死の闘いの真中の *Außerichsein* の止揚のみが、何故「直観」として起らねばならなかったのか。一般に直観の立場こそヘーゲル自身、媒介的対象の客観性の欠如の故に、即ちその直接性、独断性の故に、最も強固に斥けたものではなかったのか。何処までも過程的対象客観的媒介を通した「意識」又は「自意識」の経験を問題として来たヘーゲルが、何故ここでのみ「直観しなければならぬ」と言わなくてはならないのか。「意識に対して……云々のことが現われる」とか「云々を通して……云々のことが自意識に対して成立する」とか言う表現に一貫された『精神現象学』に於いて、「直観しなければならぬ」とここで言わざるを得なかったのは、一体どういうことなのであろうか。

この問いに対しては、上述し来たことからして、実は既に答えられている。 *Außerichsein*（主語喪失的非主語）即 *reines Fürsichsein*（真の主語）という、主語喪失的非主語と純粹主語との同時的自己同一の關係は、即ち他者（述語）の絶対否定（他者の死）としてのみ成立したのであるから、ここではこの主語の自己恢復的自己同一を即ち「純粹対自独立存在」を真に「対象」客観的に述語づけてくれる対象は最早そこにはない。「純粹対自独立存在」 \parallel 「自立的対象」の真理（自立的存続的判断）はない。「各々は己れの *Anderssein* を純粹対自独立存在として即ち絶対否定（の力）として直観しなければならぬ」とここでヘーゲルが言わなければならない所以である。ヘーゲルの的に言えば、「真理」（判断）の喪失態は、主語恢復的な姿では主語的な「直観」とならなければならない。「真理」（判断）の抽象化は直接的な「直観」とならなければならない。が「直観」は決して「真理」（判断）ではない。それは存続的対象面を持たない故に、却って自身自立的ではなく単に消滅的なのである。ヘーゲルはそこに「直観」の消極面を見ていたのであるが、このことは、右の自他の事態を、同じことではあるが逆に他自的に見た場合、一層明確になる筈である。

即ち、《AuBersichsein》(他者)即《absolute Negation》の直観に於いて且つこの直観として、主語喪失的非主語は決定的に消滅する。この直観即自己の消滅として、それは消滅的直観というより、むしろ直観的消滅である。主語喪失的非主語はこの直観として死するのである。

「各々は己れの Anderssein を純粹対自独存存在として即ち絶対否定(の力)として直観しなければならぬ」。「闘ふ」の終結を示すこの《AuBersichsein》即《reines Fürsichsein》は、述語消滅の事態に於いて単に主語恢復的に「直観」とならなければならなかった、或は主語喪失的非主語そのものの消滅として単に述語を刹那に発見的に観る「直観」とならなければならなかった。ヘーゲルに即して考えれば、即ち上述の意味に於いて判断的に考えれば、そうである。がしかし我々は、今一度、上述して来た闘いの真中の、否生死の闘いそのものの全体である《AuBersichsein》に即して考えてみなければならぬ。

一般的に言つて、ヘーゲルに於いて《AuBersichsein》とは、自己(主語)の外に出て(自己を失つて、或は或る意味に於いては自己を空しくして)、他者(述語)に撞着し、その他者と同じ在り方となる、従つてその意味で他者である、ということである。従つて《AuBersichsein》とは、主語的には主語喪失的非主語の在り方であり、述語的には求むべきところの述語の在り方である。《AuBersichsein》は、この両者にまたがる存在であり、最終的に従つてまた実は原初的に、判断の、コブラの地盤としての存在である。即ちこの《AuBersichsein》の中に於いて、主語喪失的非主語は他者(述語)のなかに自己を見且つ見出すという在方で他者を止り揚し、主語恢復的に主語の内へ還歸することにより、主語の自己同一と共に同時に主語に述語なる自己同一を形成し、以て判断を完成することとなる。しかしながら、この「生死の闘ふ」そのものの真中の《AuBersichsein》は、既に述べたように、決して「判断」的な《AuBersichsein》ではあり得なかつた。それは、この《AuBersichsein》の中から何が出て来るか全く分らぬ《AuBersichsein》である。主語喪失的非主語が更に底無しに徹底的に無になつてしまふか、或は求むべき述語が全く消滅してし

まうか、或は兩者ともそうなつてしまふか、全く如何にしても、「判断」のあり得ないところまで追いつめられてしまふか、《AuBersichsein》は「判断」(Wahrheit)を破る《AuBersichsein》である。この《AuBersichsein》から果して出られるかどうか分らなう《AuBersichsein》である。若しそこから出られぬ時、即ち死であるより外ない底の、絶対に切羽つまつた絶体絶命の《AuBersichsein》である。そこからたとえ主語が自己恢復的に出て来たとしても、その主語は果して自己同一的な主語であるかさえ分らぬ《AuBersichsein》である。そこから若し主語が自己を恢復して出て来た時、即ち求むべき述語の死である。若し述語が出て来た時、即ち既に(非)主語は無い。如何にしても「判断」(Wahrheit)は成立しなう。「判断」そのものを破らざるを得なう《AuBersichsein》である。がしかし、まさにかかる在り方に於いて、これは徹底的な本来の《AuBersichsein》はなうのか。従つてこの《AuBersichsein》を「即ち主語喪失的非主語の場」で、或は同じことであるが、固定的タウトロギーとしての《ge-meiner Gegenstand》の場)更に別に「意識」し得るものがあるてはならない。若しここで別にそれがあつたとして、それは絶体絶命の《AuBersichsein》ではなう筈である。若しここで絶体絶命を見ることが出来るとすれば、それは真の《AuBersichsein》では最早なくなつてゐる。それは、未だ絶体絶命そのものの全体になつていないからであり、即ちそれの外にあり、それから離れてゐるからに外ならない。或はここで絶体絶命を「意識」し観ることが出来ることすれば、即絶命であり、絶命の瞬間(直観)であるからである、即ちそれから離れるからである。従つてこの《AuBersichsein》は、その徹底に於いて、絶対に自らを「意識」し得ぬ《AuBersichsein》になければならぬ。主語喪失し、求むべき述語も固定的タウトロギーとなつて述語失格的に喪失してゐる《AuBersichsein》である。それは、《AuBersichsein》は「見ること」の出来ぬ《AuBersichsein》とならなければならぬ。

この絶体絶命の《AuBersichsein》(具体的には、絶体絶命の自他兩者という、「単に固定的に」存在する意識」或は「生命の存在の中に埋没してゐる意識」と「純粹対自独存存在」(「自意識」)との間は、文字通り絶体絶命、即ち

殺「意識」(殺「生命」という存在の中へ埋没している意識)であり、「死」の断絶であるが故に、この間へは絶対に更に意識は入り得ず、若し入ったとしたら殺されるより他ない。即ち、この間をここで別にそれを見る意識によって「媒介する」ことは絶対に否定されており、この間がここで「意識に対して」あることは絶対に不可能である。

《AuBersichsein》が真に絶体絶命の喪失の深さである時、最早「媒介」は深く失われてしまっている、最早「判断」《Wahrheit》は不可能になってしまっている。それは他による対象客観的「媒介」を殺すものであるからである。

逆に言えば、対象客観的に「媒介」されつつ自己止揚的に「判断」に移行し得る如き《AuBersichsein》は、真に生死の《AuBersichsein》ではないであろう。生死の《AuBersichsein》は主語∥述語的方向には動じて来なく。それは、主語喪失し、求むべき述語も固定的タウトロギーとなって述語失格的に喪失している《AuBersichsein》である。この《AuBersichsein》と《reines Fürsichsein》との間は、殺身体的「意識」であり、この直観の間へ自他の意識は媒介的・中間的に入り込めず、若し入り込めば、身体的「意識」となって「意識」の死であろうということは、この間が脱自的であるということである。即ちこの間は瞬間なのである。瞬間とは時間の極小の単位を謂うのではない。脱自的の時が瞬間なのである。

ヘーゲルが「生死の闘い」の終結の語として「直観しなければならぬ」と言わなければならない事象を、半ばヘーゲルから離れて、「直観」の消極面からではなく、むしろその積極面に於いて、解明した所以である。

「直観」は「判断」《Wahrheit》ではないが故に消極的消滅的であるとするのは、「判断」的には「真」である。 「判断」は脱自的には即ち瞬間的には成り立たない。しかし瞬間は「判断」では断じてないのであり、ヘーゲルといえども「意識」から「自意識」への「転換」の瞬間を『精神現象学』に於いて判断することは出来なかつたのである。即ち、前者から後者への「転換」は判断的には何処までも不明のままであり、明らかに得ないのである。「自意識」ははじめから「自意識」から即ち「欲求∥自意識」Begierde から出立するより外なかつたのであ

る。これはいずれにしても如何んともすることの出来ぬ事柄である。

「生死の闘い」の終結は、『AuBer sich』即『reines Furchsein』の「直観」であった。具体的には「(単に固定的に)存在する意識」即「自意識」の「直観」であった。

主語喪失的非主語が敵を打ち殺したのは、敵を打ち殺したのではない。「(単に固定的に)存在する意識」即ち対象的「意識」を打ち殺したのである。

我が敵を打ち殺したのは、我が打ち殺したのではない。絶体絶命の『AuBer sich』が打ち殺したのである。

即ち、身体的「意識」が身体的「意識」を殺して、『AuBer sich』が『AuBer sich』を殺して、その瞬間即ち死の断絶として、「意識」即「自意識」の断絶的「転換」が直観されたのである。

即ち、(一)「意識」と「自意識」との間の絶対的断絶と(二)前者から後者への過程的転換という、二つの相対立する事柄が、ここに、「二」つの「意識」に分割されて且つ『精神現象学』に於ける過程的順序の次元を半ば無視したかたちで、つまり『AuBer sich』の徹底した仕方に於いて、ここに絶対的断絶即転換として一点集中的に入り込んでいる。即ち、一に、「意識」は「自意識」に絶対的に転換し得ぬ程に断絶され(死として殺され)ているのであり、一に、「意識」から「自意識」への瞬間的転換はこの絶対的断絶(死)としてのみ「直観」されるのである。

二

「支配」を目指すことになるこの「生死の闘い」は、一応『精神現象学』の圏域から離れても、我々にさまざまなことを示唆して止まぬように思われる。

近代から現代にかけての時代は、自意識の時代である。近代を劃するデカルトのコギト・エルゴ・スムは、既にかく成立した「自意識」を土台としての、その上での、より決定的に純粹に深められた、同一自己内に於ける自己確實

性である。が自意識の時代である現代は、自意識中に於いて却って自意識ということを簡単に考えている、全く自明のことと考えている。現代人にとっては、所謂自己が自己を意識するということが程易しいことはない。自意識は、人間の全く自由になる自意的な加工品ですらある。がしかし、そこには遠い祖先の血がある筈である。我々が自己自身を意識し得、自己自身を見る時、そこには実は我々の遠い祖先の血が流されているのだと思うのは、単なる妄想に過ぎないのであろうか。「欲求≡自意識」Beginnde は、その「求」の故に対象の自立性に撞着し、後者の故に更に対象に自己否定を要求することにより、自立的对象の存続的自己否定面（身体）を存続的に享受し得ることとなったが、このことは同時にそれと一つに、対象を「自己否定に於いて同時に自立的であるもの」（「自意識」）へと触発し、うながし、ここに「自意識の二重化」をもたらし、この「自意識の二重化」は、更に「欲求」の（時として自己否定的な）「求」の延長上に於いて——即ち相互に排他的身体的対自独存存在ということから、互に他に対して「自己の对象的な在り方」の純粹否定を示し合い、真に「自意識」たらんとする「求」に於いて——再び困窮轉換的に（必然的に）「明示」の行為の二重化をうながし、かくて生死を賭した血の闘いにまで到る。この云わば業的な大きな構造の下で、所謂「支配」を指す自他の「生死の闘い」はくり拡げられる。「意識」から「自意識」への絶対的断絶即直観的轉換は、『精神現象学』に於ける過程的順序の次元を半ば無視したかたちとなって、ここに一点集中的に入り込む……我々は如何に高価な犠牲に於いて即ち生命の犠牲に於いて「自意識」が成立したかを思わねばならない。自意識である我々が自己自身を見る時、即ち我々が我々である時、我々はそこに祖先の血を見なければならぬ。

右のこの事態は二重意味である。我々自身、死した「自意識」と生きている自意識という、歴史的な「自意識の二重化」の中にいるのである。即ち、(一)自意識である我々は、祖先の尊い遺産そのものである。祖先が血を流したが故に、我々は自意識として自己自身を見ることが出来るのである。がしかしそれと共に(二)自意識である我々が自己自身を意識する時、自己自身を見る時、そこに我々は祖先の血を見るのである。即ち祖先とは他ならぬ我々自身なの

であり、血を流しているのは祖先ではなく我々なのである。祖先とは祖先のことではなく、我々自身である。即ち『精神現象学』は我々自身の Sache でなくてはならぬ。

「自意識」そのものの成立が「欲求」の「求」の窮極点に於いて、かく殺他であるとするれば、最も対象客観的と誇示せられている現代の技術に於いて却ってその鋭端を現わす《Herausforderung》(Martin Heidegger, Die Frage nach der Technik, in 《Vorträge und Aufsätze》, S. 24, 26, 27, 29)——絶対に大きな「求」——が、世界の《Geschick》として、その一端を原子力という仕方、しかも絶対的殺として、現前して来ているのは、不可思議なことではなぬ。勿論、単なる一「自意識」と世界としての《Geschick》たる《Herausforderung》とは、一つにはならぬと言われざるべからう。それは、単なる一「自意識」が如何にともすること能わざる、有無を言わざる、絶対に大きな「強要」(Herausforderung)であり、しかもそこで人間(自意識)が schicklich であるような仕方、geschenkt な《Geschick》であると云われるべからう。そしてまた事実その通りであらう。がしかし《Geschick》とこの《Herausforderung》は、更に尖鋭にこの「欲求＝自意識」——決して単に対象「意識」ではなく——を herausfordern し、支配し、使用しているのである。若し《Herausforderung》が支配し使用するものが単に対象「意識」であるとすれば、《Herausforderung》はたとえ対象「意識」を使用したとしても、最後例えば物質のエネルギーを《herausstellen》とこの自意識を「要」しようからば、《Herausforderung》は《herausstellen》のたぐい、《Vor-sich-hin-und-zu-sich-herstellen》とこの自意識を「要」しようからば、《Herausforderung》は「欲求＝自意識」を herausfordern し支配することにより、その絶対契機たる対象「意識」を支配しているのである。このことについては、後に今少し立ち入って論ずることが出来るかと思う。

「自意識」はその成立に於いて殺他的である。このことは、『精神現象学』に於けるこの当該箇所から離れて、宗教的意味に於いても理解され得るであらう。「自意識」が「自意識」として成立する原初そのものが業的である。で

宗教の立場に於いては、「自意識」の絶対的滅却こそ主要事である。誤解を承知の上で非常に大まかに言う時、宗教の立場は、『精神現象学』に於ける「宗教」の位置を無視して言えば、対象「意識」から「自意識」への《Bildung》の方向と言うよりも、むしろ先ず逆の方向、Ent-bildung の方向に成り立つものでなければならぬであろう、先ずBildungを取り去る方向、無知の方向でなければならぬであろう。何よりも先ず、かく決定的に成立した「自意識」の滅却の方向でなければならぬ。そして若し「自意識」の成立が生死を賭した殺他の闘いを通して「直観」的のみ可能であったとすれば、「自意識」の滅却も亦生死の問題でなければならぬであろう、生死を賭けた生死の直観たらざるを得ないであろう。宗教が如何に困難な課題であるかを、我々は『精神現象学』の「生死の闘い」の箇所からも逆に学ぶことが出来ると思う。(未完)

- 1) 拙論、『精神現象学』に於ける「意識」から「自意識」への転換(『宗教研究』一八七号)、一一二頁～一一九頁。
- 2) 右拙論、一〇一頁～一一一頁参照。
- 3) 以上の叙述は右拙論を前提としているので、それを参照して頂ければ幸いである。

(筆者 大阪工業大学一般教育科〔倫理学〕講師)